２０世紀の始まり（1901～1915)、その２

≪川崎への工場進出≫

１９０７年（明治４０）以降、応用化学、電気通信などの領域における技術革新を受け、川崎に工場の建設ラッシュが始まります。それは、帝都東京と国際貿易港横浜の中間に位置し、東海道線の川崎駅があるという、地の利を考えた企業の選択でした。川崎駅周辺から、京急大師線の開通もあって、多摩川下流南岸沿いに大型の工場が建設されていきました。

１９０７年（明治４０）	横浜製糖工場（後の明治製菓）
１９０８年（明治４１）	東京電気会社（後の東芝）
１９０９年（明治４２）	日本蓄音器商会（後の日本コロンビア）
１９１１年（明治４４）	日本電線工場（後の三菱電線）
１９１２年（明治４５）	日本鋼管（後のＪＦＥ）
１９１２年（大正　３）	富士紡績工場（跡地は川崎競馬場）
１９１４年（大正　３）	味の素工場

そして、１９１４年（大正３)、多摩川直轄改修のキッカケとなる「アミガサ事件」が発生するのですが、その話の前に、しばし、周辺の時代動向を点描していきます。

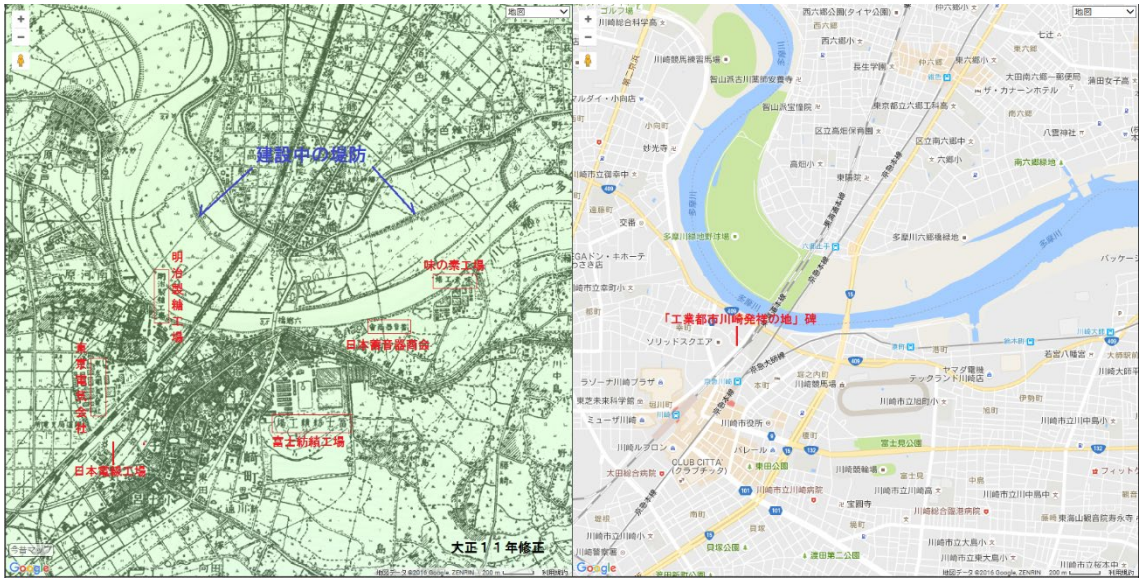
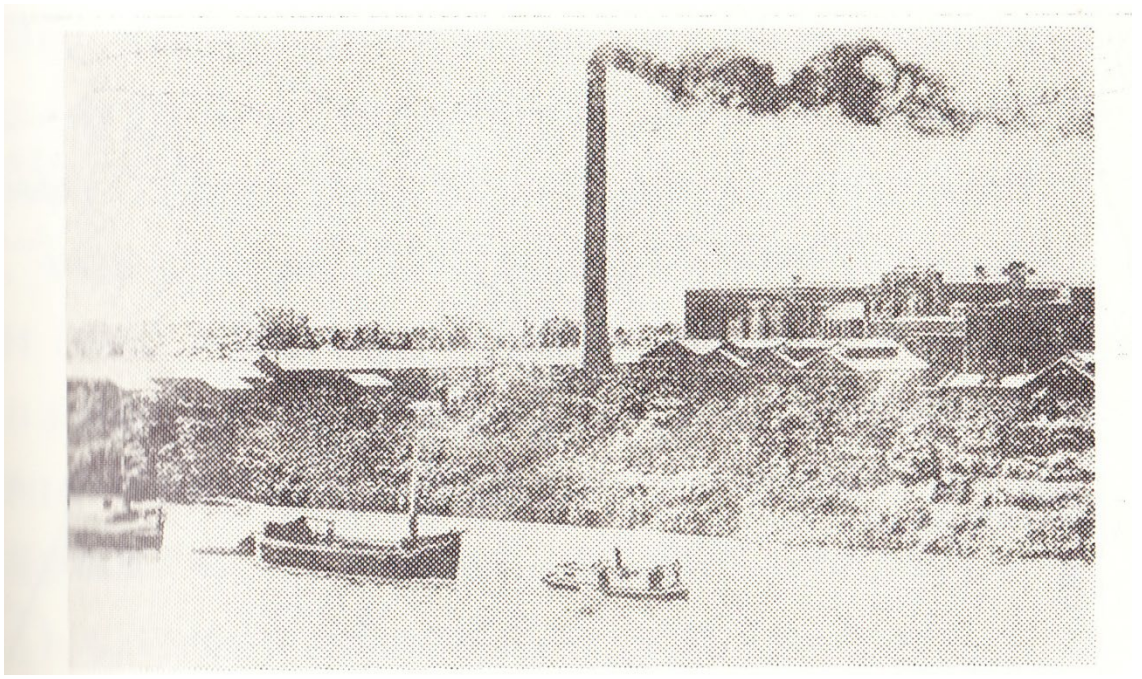
というのは、川崎の工業都市化のほか、砂利鉄道の敷設、田園都市の開発造成など、多摩川流域の新しい変革がほぼ同時に胎動するからです。

なお、現在、東京電気の工場跡地は、再開発され、ラゾーナ川崎というショッピングモールなどに変わり、躍進する川崎市の象徴となっています。

また、横浜製糖の工場跡地は、“かわさきテクノピア”の一角にある“川崎市産業振興会館”となっています。道路に面した植え込みの中に 「工業都市川崎発祥の地」の碑が建っています。

写真は、①大正１１修正の地図と現在地図（今昔マップＨＰに細見加筆）、②「工業都市川崎発祥の地」の碑に刻まれた横浜製糖写真

①



②